

江口 直光 (Naoaki EGUCHI)

学位：修士（学術）

略歴：東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了

東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学（単位取得退学）

専門分野：ドイツ文化研究、表象文化論

研究課題：1. リヒャルト・ワーグナーおよびオペレッタを中心とする音楽劇
2. ヴァイマル期ドイツを中心とする映画

【著書】

- ・『ワーグナー・パースペクティヴ 2025』（共著、アルテスパブリッシング、2025 年 7 月）
- ・『知ってほしい国ドイツ』（共著、高文研、2017 年 9 月）
- ・『アプファールト〈ノイ〉— スキットで学ぶドイツ語』（共著、三修社、2015 年 2 月）
- ・『ワーグナー事典』（共著、東京書籍、2002 年 3 月）

【翻訳】

- ・クリスティアン・マルティン・シュミット著『ヨハネス・ブラームスとその時代』（西村書店、2017 年 11 月）
- ・バリー・ミリントン編著『ヴァーグナー大事典』（共訳、平凡社、1999 年 3 月）
- ・ジム・サムソン編『西欧の音楽と社会第 8 巻 市民音楽の抬頭』（共訳、音楽之友社、1996 年 5 月）
- ・ジム・サムソン編『西欧の音楽と社会第 9 巻 世紀末とナショナリズム』（共訳、音楽之友社、1996 年 12 月）

【論文】

- ・「オペレッタ『微笑みの国』試論 — 「僕の心はすべて君のもの」を中心に」（愛知文教大学国際文化学会編『愛知文教大学比較文化研究』第 18 号、2025 年 2 月）
- ・「『君の臍臓をたべたい』考 (2)」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 27 巻、2025 年 2 月)
- ・「『君の臍臓をたべたい』考 (1)」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 26 巻、2024 年 2 月)
- ・「アニメ『アルプスの少女ハイジ』のオープニングとエンディングにおける映像と音声の相互作用」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 22 巻、2019 年 11 月)
- ・「映画『ニーベルンゲン』とワーグナー」(『ワーグナーシュンポシオン 2018』アルテスパブリッシング、2018 年 7 月)
- ・「映画『ニーベルンゲン』第 1 部におけるジークフリート像再考」(愛知文教大学国際文化学会編『愛

知文教大学比較文化研究』第 14 号、2016 年 11 月)

- ・「ジャック・オフエンバックの《地獄のオルフェ》と《美しいエレヌ》 — 哄笑から陶酔へ —」(愛知文教大学学術委員会編『愛知文教大学論叢』第 17 巻、2014 年 11 月)
- ・「愛と権力のアンチノミー — 《ニーベルングの指環》に関する一考察 —」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 13 巻、2010 年 11 月)
- ・「オルトルートは何者か — 《ローエングリン》詩論」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 11 巻、2008 年 11 月)
- ・„Kandinskys Idee der Kunstsynthese und seine Wagner-Rezeption“ („Medien und Rhetorik:Grenzgänge der Literaturwissenschaft. Beiträge der Tateshina-Symposien 2000 und 2001, herausgegeben im Auftrag der Japanischen Gesellschaft für Germanistik von Tetsuro Kaji u.a.“, Iudicium-Verlag, 2003.)
- ・「愛知文教大学のドイツ語教育」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 5 巻、2002 年 11 月)
- ・「《きよしこの夜》考 — その起源と伝承」(愛知文教大学学術委員会編『愛知文教大学比較文化研究』第 3 号、2001 年 11 月)
- ・「《神々の黄昏》 — 削除されたブリュンヒルデの詩句」(愛知文教大学紀要編集委員会編『愛知文教大学論叢』第 1 巻、1998 年 11 月)

【研究発表】

- ・「間テクスト的対話としてのアダプテーション — 『君の臍臓をたべたい』を例に」(愛知文教大学人文学部研究発表会、於：愛知文教大学国際文化会館、2024 年 12 月 24 日)
- ・„Juden als Fremdbilder in den Musikdramen Richard Wagners.“ (日本独文学会主催アジア・ゲルマニスト会議 2008、於：金沢星陵大学、2008 年 8 月 28 日)
- ・„Hoch- und volksculturelle Elemente bei der Festspielidee von Richard Wagner“ (日本独文学会・ドイツ学術交流会共催第 46 回文化ゼミナール、於：アートランドホテル蓼科、2004 年 3 月 16 日)
- ・「カンディンスキーの舞台作品」(ポスター発表、日本独文学会 2003 年度春季研究発表会、於：武蔵大学、2003 年 5 月 31 日)
- ・「ワーグナーとカンディンスキー」(日本ワーグナー協会第 229 回例会、於：東京芸術劇場、2002 年 11 月 23 日)
- ・「カリキュラム改編と外国語教育 — 愛知文教大学の場合 —」(ドイツ語教育研究会第 84 回例会、於：ゲーテ・インスティトゥート東京、2002 年 7 月 19 日)
- ・„Die Idee des Gesamtkunstwerks von Kandinsky und seine Wagner-Rezeption.“ (日本独文学会・ドイツ学術交流会共催第 42 回文化ゼミナール、於：アートランドホテル蓼科、2000 年 3 月 21 日)

【その他】

- ・公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価 評価員 (2017 年 4 月～2018 年 3 月、2019 年

- 4月～2020年3月、2022年4月～2023年3月、2023年4月～2024年3月〔評価団長〕、2024年4月～2025年3月〔評価団長〕)
- ・「多文化社会ヨーロッパ」(高大連携事業、於：高松学園伊那西高等学校〔オンライン〕、2024年10月31日)
 - ・「多文化社会ヨーロッパ」(高大連携事業、於：高松学園伊那西高等学校〔オンライン〕、2023年10月12日)
 - ・「ヨーロッパ、ユーロ、クリスマス」(高大連携事業、於：高松学園伊那西高等学校〔オンライン〕、2021年12月9日、2022年11月10日)
 - ・「EUとは何か」(出張授業、於：岐阜県立瑞浪高等学校、2019年11月18日)
 - ・「ドイツ語入門」、「ドイツのクリスマス」(出張授業、於：愛知県立豊田東高等学校、2018年11月12日)
 - ・「ドレミとABC」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2016年4月)
 - ・「ドイツ語入門」(出張授業、於：瀬戸北高等学校、2015年7月8日)
 - ・「ドイツ語ってどんな言葉？」(出張授業、於：瀬戸北高等学校、2015年1月26日、6月15日)
 - ・「バッハは聖書をどう読んだか？」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2015年1月15日)
 - ・第12回日本独文学会賞ドイツ語部門選考委員(選考委員会、於：関西大学、2014年10月)
 - ・「さすらい人の歌」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2013年11月21日)
 - ・日本ワーグナー協会主催リヒャルト・ワーグナー生誕200年記念懸賞論文審査委員(審査委員会、於：国際文化会館、2013年7月)
 - ・小牧市文化振興推進会議委員(2013年7月～2017年6月)
 - ・「ライン川の流れと音楽」(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2013年1月17日)
 - ・「モーツァルト・アッラ・トゥルカ」(かすがい熟年大学生活コース、於：春日井市民会館、2012年7月4日)
 - ・『「忘れるものは幸いである」― ウィンナ・ワルツの美学 ―』(愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2010年1月21日)
 - ・「リートでたどるドイツの四季(1)」、「同(2)」(小牧市民大学講座、於：小牧市公民館、2008年2月2日/3月8日)

令和 8（2026）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	江口直光	職位／役職	教授／副学長・大学院研究科長
-----	------	-------	----------------

1. 教育の理念

愛知文教大学は「質実有為で宗教的情操を身につけた真人の育成」という建学の精神を、グローバル化する現代社会において一生を生き抜く強い心とそれを助ける社会力を養成するという現代的理念として継承しており、この理念にもとづき、人文学部人文学科では、急激に変化する現代社会を生き抜いていく人材を育成するために、意思伝達の道具としての言葉を社会や文化とのかかわりから問い直した「ことば」を学修基盤として教養教育を展開している。本学が掲げるこのような方針を踏まえ、私は「ことば」をさまざまな記号が織りなすネットワークととらえ、記号のネットワーク＝「ことば」の読解を通じて社会・文化現象を読み解く力を養成することを。自身の教育活動における理念とする。それは、本学の教育目的である「真のコミュニケーション力の養成」に通じると考える。

2. 教育活動の内容

①愛知文教大学における担当科目

令和 7（2025）年度：ドイツ語入門、映像文化論、欧米の文化、ポピュラーカルチャーと哲学、ことばと人文学、舞台芸術論、時事研究、アカデミアゼミ A, B, C, D、比較文学文化論 B（大学院）

令和 8（2026）年度：映像文化論、ポピュラーカルチャーと哲学、ことばと人文学、舞台芸術論、ヨーロッパ史、時事研究、アカデミアゼミ A, C, D、比較文学文化論 B（大学院）、映像文化研究（大学院）、音楽・舞台芸術文化研究（大学院）、研究指導 A, B（大学院）

3. 教育の方法

記号のネットワーク＝「ことば」の読解を通じて社会・文化現象を読み解く力を養成するという教育の理念を実現するためには、教員の適確なナビゲートによって科目履修者が主体的に学修に取り組む環境を創出することが必要である。そのためにアクティブラーニングの一環として ICT を活用し、Google classroom を通じて提出された課題に教員がコメントを加えて返信するというかたちで双方向のやりとりをつねに行なっている。また、アカデミアゼミでは全履修者によるディスカッションを重視している。なお、アクティブラーニングについては特定の形式が用いられているかどうかという指標だけで判断することはできず、学修者の「アクティブ」な学修をいかに実現できるかにかかっていると考え。さらに、課題等で生成 AI を効果的に用いる方法を採用している。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

令和7（2025）年度に担当した科目では、授業調査アンケートの結果および各種課題や定期試験結果を総合した成績評価から判断して、各科目において当初掲げた学修目標は達成できたと考える。カリキュラム改編に伴って初めて開講する科目がいくつかあった。「舞台芸術論」は、令和6（2024）年度まで「ことばと文化 ― 日本と世界」という名称で他の教員と合同で行なっていた科目を受け継ぐ科目で

ある。履修者数は「ことばと文化…」の時とほぼ同じであったが、時間帯が午後の最初ということもあってか、一部に履修態度のよくない事例がみられた。「ポピュラーカルチャーと哲学」は「欧米の思想」の後継科目であるが、時間割の影響もあるだろうが、授業運営上は支障はなかったものの履修者がこれまでと比べて非常に少なかった。「時事研究」は令和7（2025）年度入学の一般学生から2年次配当の必修科目として新設された科目で、令和7（2025）年度はそれ以前に入学した学生を対象に選択科目として開講した。授業方法や進度に試行錯誤の面があったことは否めないが、履修者の意欲は比較的高く、最終的には学修目標を達成することができた。この経験を踏まえて令和8（2026）年度からの必修科目としての開講に臨みたい。

5. 今後の目標

教育の理念およびそれを実現するための教育の方法はおおむね問題ないと考えるため、科目ごとの個別の状況に応じて細部を臨機応変に修正して臨む。とりわけ、令和4（2022）年末からの生成 AI の普及には目覚ましいものがあり、知的活動を営む際に無視できない存在になっている。大学教育においても生成 AI をつねに意識し、学習の阻害要因と捉えるのではなく、教育活動に有益な効果をもたらすような使用法を検討していくことが求められる。試行錯誤を重ねているが、今後も効果的な利用法を探っていきたい。